学苑・日本文学紀要　第八三一号　一四～二三（二〇一〇・一）

『苔の衣』論

――『源氏物語』の新たな〈再生産〉を目指して――

大倉　比呂志

はじめに

かつて「『苔の衣』論」（「学苑」第七二八号　二〇〇一・2）を発表したが、その後気付いた点を二つほど追加しておきたい。

一、『源氏物語』に対する変奏

―東院上と西院上をめぐって―

兵部卿宮（三条帝二宮）と苔衣姫君とは兄弟同然に育ったが、やがて兵部卿宮は苔衣姫君を思慕するようになる。その姫君が東宮（兵部卿宮の兄で、後に今上帝）の女御（後に中宮）となった後、兵部卿宮は苔衣姫君と密通事件を引き起こし、若宮（後に東宮）が誕生する件は、恋も密通も遂げられない狭衣大将と源氏宮との関係の裏返しを描き、『狭衣物語』が回避した『源氏物語』で語られている密通を『苔の衣』では『狭衣物語』を意識することによって、回復したという逆説を生じたと、足立繭子[1]が指摘したことは画期的であったといえよう。だが、苔衣姫君の母親・祖母世代のことが語られている前半部分、特に春の巻においては『源氏物語』の影響が濃厚であると思われ、彼女たち（東院上と西院上）がどのように語られているのか、その点に関していささか述べていくことにする。

故先帝の弟である一世源氏の二男権大納言（後に内大臣・右大臣）の北の方に関して次のように語られている。

① 北の方二所おはす。一人は大将殿（権大納言の兄で、後に内大臣）の三の君（東院上）、㋑（権大納言ガ）三位の中将と聞こえ給ひし時より婿に取り給ひぬれば、やんごとなきさまには思しながら、いかなりけるにか御心を留め給はずあくがれ給ふを、誰も誰も口惜しきことに思しける。故中務の宮の姫君二所持ち給ひける。……（姉君ハ関白北の方デアルガ）妹君（西院上）は容貌などもいますこしらうたきさまにものし給ひければ、父宮もあはれにかなしきものに扱ひきこえ給ひしが、なにとなきさまにて宮も失せ給ひし後は、心苦しげにて母宮の傍らにおはしける。㋺いかなる隙にかこの大納言ほのかに見給ひて、ねんごろに聞こえ給へば、心安きさまにもやと思してゆるし給ひてけり。（春・八―九）[2]

とあり、傍線部㋑に関しては再度、

② 大納言殿も（東院上ニ対スル）内々の御心ざしこそ深くなけれども、いまだ幼くより見初めきこえ給へば、おほかたにはやんごとなくあはれに思ひきこえ給ふに、かくうち解けぬ（東院上ノ）御気色を心苦しく思す。（春・一三）

とある。権大納言にとって東院上は最初の北の方であり、それなりに重要な人物であると認識しながらも、夫婦仲が余り良くないと語られている。[3] これは光源氏が「人よりさきに見たてまつりそめ」（紅葉賀・一―三一六）たにもかかわらず、「心にもつかずおぼえたま」（桐壺・一―四九）う葵上が「け近きさまや後れ給ふらん」（春・二一）東院上造型の基底にあるのではなかろうか。また、

③（東院上ノ兄弟デアル）左衛門督（後に権大納言）、宰相中将（後に源中納言）など、ものものしき御はらからたち、人に劣るべくもなく（権大納言ヲ）もてなしきこえ給へば、まことに（権大納言ノ東院上ヘノ）御心はなけれど（東院上ニトッテハ）やんごとなきさまに頼もしげなり。（春・九）

とあるのは、例えば「（葵上ノ父デアル左大臣ハ光源氏ニ）いとなみかしづきこえたまふ」（桐壺・一―四九）、「（左大臣ノ）御むすこの君たち、ただこの（光源氏ノ）御宿直所の宮仕をつとめたまふ」（帚木・一―五四）と軌を一にしているのであって、やはり東院上には葵上像の影響が濃厚であるといえよう。

一方、傍線部㋺の西院上には紫上像が影響を与えていると考えられる。西院上は、

④ 東の院にはもとより大将殿の三の君（東院上）住み給へば、西の方にこの君（西院上）を渡しきこえ給ふ。（西院上ヲ）人知れぬかしづきものにし給ふを、㋩東の御方にはめざましく世とともに思しけるほどに、……（春・九）

と語られているわけだが、紫上が光源氏によって二条院に連れて来られたのは西の対であり、さらに、傍線部㋩は「これ（紫上）はいとさま変りたるかしづきぐさなり、と（光源氏ハ）思いためり」（若紫・一―二六二）とあって、両者は「かしづきもの」「かしづきぐさ」という類似語で語られている。そのうえ、以前から光源氏と葵上との関係は、

⑤ 殿（左大臣邸）にも、（光源氏ガ）おはしますらむと心づかひしたまひて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。……（葵上ハ）世には心もとけず、（光源氏ノコトヲ）うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、……（若紫・一―二二六）

とあって、傍線部のごとく、二人の仲は疎遠な状態であり、光源氏が紫上を引き取ったことに関して、

⑥『二条院には人迎へたまふなり』と人の聞こえければ、（葵上ハ）いと心づきなしと思いたり。（紅葉賀・一―三一六）

と語られており、傍線部は前述した④の傍線部㋩と類似している点からも、東院上と葵上とは近似値の関係にあるといえよう。

またその東院上は、

⑦（権大納言ハ）帰り給ひて、まず東の御方へおはして、日頃の御物語など聞こ

え給へど、（東院上ハ）例の御心解けぬさまに思しむすぼほれたるも、……

⑧ 人（権大納言）のつらさはさることにて、（東院上ハ）わが御宿世思ひ知られて一方ならず思ひ結ぼほれ給へば、……（以上、春・一三）

⑨ 右大将殿の上（東院上）もいとど心ゆかず物を思しむすぼほるるを、……（春・一九―二〇）

⑩ 宮の姫君（東院上ノ養女デアル帥宮北の方）をいかにせんとあたり苦しきまでもてなしかしづき給ふを、殿（権大納言）は心得ず思して、ことにさし出でもし給はねば、「まろがすることなれば」と（東院上ハ）むつかり給ふ。（春・三七）

⑪ このこと（注―西院姫君の盗み出しに失敗したこと）に（東院上ハ）むつかりつつ、姫のいそぎ（注―西院姫君と権大納言との結婚準備）も御心にも入れ給はねど、……（夏・一〇七）

などとあるように、東院上には「むすぼる」あるいは「むつかる」ということばが九例も多出され、それらは東院上が不快もしくは不機嫌な状態になるのを意味しているのである。一方、葵上にはそのようなことばは使われてはいないものの、東院上と葵上との類似性が顕在化しているのだ。(4)

以上の点から、冒頭部において東院上と西院上はそれぞれ葵上と紫上を基底にして造型されているといえよう。とすれば、権大納言は光源氏に相当すると考えられるわけだが、東院上には子がなく（東院上の姉の中君と式部卿宮との娘である帥宮北の方を養女とし、その後、西院上が死去したために、西院姫君を引き取って養女としている）、西院上には三人の子供が誕生するのであるから、葵上は出産後に死去したといえども、夕霧を出産しているのに対して、子のない紫上は明石姫君を養女にしている点、さらには、子のある葵上が死去し、子のない紫上が生き永らえているのである。子のない東院上が生き永らえ、子のある西院上が死去するという点から考えると、『源氏物語』における葵上と紫上とを逆転的に利用して東院上と西院上とが造型されていると同時に、東院上は内大臣女であり、西院上は中務卿宮女である点から、左大臣女の葵上と兵部卿宮女の紫上とは『源氏物語』に即して造型されてはいるものの、子の有無に関しては葵上と紫上とを逆転させた形で造型されているのである。とすれば、『苔の衣』の始発部では『源氏物語』における光源氏の正妻葵上と正妻格である紫上とが重視されて、その二人を基軸にして変奏された物語が展開されているのだといえよう。すなわち、光源氏と葵上との関係が不和的状態であることと相俟って、紫上が二条院に迎えられたことを聞いた葵上は「いと心づきなしと思いたり」（紅葉賀・一―三一六）という展開が基層に据えられて、東院上と西院上という形に変奏されながら、いわば『源氏物語』的世界の新たな〈再生産〉がなされたのだ。

二、〈いじめ〉と〈報復〉

西院上の死後、

⑫ 東の院にはつねにさやうに（注―西院姫君を引き取ること）のたまへば、頼もしき人などもなきに、（権大納言ハ）近きほどと言ひながら（西院姫君ト）離れおはするにおぼつかなくてこなた（東院）へ移ろはせきこえ給ふにも、（故西院上ガ）さばかりうしろめたく思したりしをと、候ふ人々も大臣（権大納言）もあはれもよほさる。（春・五三）

と西院姫君が東院上に引き取られることを、かつて西院上も懸念していた

ごとく、権大納言側でも諸手を挙げて賛成しているわけではなく、

⑬（東院上ガ西院姫君ヲ）迎へ取り給うて後はかひがひしくつれづれもこよなく紛れ給ふばかりもてなし給ふを、候ふ人々はいつまでとなま心づきなく思ふ。（春・五三）

とあり、東院上と西院上とが敵対関係にあったがゆえに、現在はともかく、将来において例えば東院上の西院姫君に対する〈継子いじめ〉が生ずる恐れがあるのではないかと侍女たちは危惧の念を抱き、西院姫君の伯母に当たる関白北の方（前斎宮）も「継母の心なん情なきと聞」（夏・七八）いているので、心配していると語られている。そして侍女たちの危惧が的中したかのように、西院姫君と関白の子である苔衣大将との結婚直前に、養女である帥宮北の方が「人笑はれなるやうにて過ぐし給ふ」ので、東院上は「（苔衣大将ガ）見るかひありてもてなされ出で入り給はんこそ、いと心やましかりぬべけれ」（以上、夏・九九―一〇〇）と思って、「（自分ノ兄デアル権大納言ヨリモ）いますこし花やかにわりなく色々しくて、おほけなき心遣ひなどする」（夏・一〇〇）弟の中納言に西院姫君を盗ませようとしたものの、中納言は誤って西院姫君と一緒にいた帥宮北の方を盗み出してしまうのである。そのために、「これ（西院姫君）を物げ無くしなさんとする罪の報ひに、神仏の憎しと思して我が姫君（帥宮北の方）を失ひつるにや、と言はん方なく」（夏・一〇五）東院上は後悔しているものの、この西院姫君盗み出しの一件は、東院上の西院姫君に対する最大の〈いじめ〉であると考えられるわけだが、西院姫君を盗み出すように弟に教唆した東院上に対して、誤って盗み出された養女の帥宮北の方は乳母子である小太夫から事の顛末を聞いて、

⑭いと心憂かりける母上の御心かな。さる腹黒なる心構への無からましかば、かかることやは出で来べきと疎ましく思さるれば、殊に（東院上ニ）物なども聞こえ交はしのたまはず、よろづ恨めしくなん。（夏・一二八）

とあるように、東院上は養女である帥宮北の方から傍線部のごとき一種の〈報復〉を甘受せざるをえなかったことに対して、「疑ひなく（東院上ガ）悪しく言ひてとり違へさせたるよと心得給ふ」と（夏・一〇六）権大納言の心中思惟が語られているのにもかかわらず、西院姫君の父である権大納言側や夫になる苔衣大将からは詰問のみならず、東院上は直接的な〈報復〉を一切受けてはいないのだ。

しかし、帥宮と北の方との間の双子の妹君の方を東院上は養育していたわけだが、（姉君は中納言の乳母[5]に預けられている）、帥宮は北の方が盗み出された件を聞いて、「あさましくかろがろしかりけるあたりかなと思」（夏・一一〇）って、「さやうの所に（娘ヲ）置きて人のものになさんもいかにぞや思」（夏・一一〇―一一一）して、妹君を自邸に連れ帰り、また東院上のもとで西院姫君が居住しているのは不安だという理由で、苔衣大将の父親である関白は息子夫婦を自邸に転居させたわけだから、子のない東院上の手許には世話する養女が誰もいなくなり、さらに、東院上が「何事も思ふに違ひて人笑はれにな」（夏・一一三）った。こうした展開には直接的な〈報復〉がなされなくても、悪事が自然に暴露されて、世間の笑い者になるという〈教訓性〉が内包されているとも解せられよう。とすれば西院姫君の父や苔衣大将が直接的に〈報復〉する代わりに、世間がそれを代行したのだとも考えられる。

ところで、そのような東院上は、

⑮ さこそ心深きことなどは思し構へしかど、（西院姫君ノ）限りなかりし御様もさすがに恋しくて、大臣（権大納言）に聞こえつつ時々参りて（西院姫君ヲ）見奉り給ふに、御調度よりはじめ、この世のこととも見えぬ造り様に斎き据ゑられ給へる女君の御様など見給ふに、なかなか心やましく思さるぞうたてきや。（秋・一二八―一二九）

とあるごとく、西院姫君のことが恋しくてのぞいたところ、大切に扱われている西院姫君を見て、不快感をもよおしている東院上に対して、傍線部のように、語り手による批判的言説がもたらされているのだ。では前述したように、東院上が直接的な〈報復〉を一切受けていないのにはいかなる理由が考えられるのだろうか。それには二つの理由が考えられよう。一つは権大納言は東院上の父内大臣のことを「つねには心ゆかず思しむつかりしこそわづらはかりしか、おほかたにはいと思ひ遣りありて頼もし」（春・三四）と思っているわけだが、内大臣の権大納言への遺言の中で、

⑯「（東院上ハ）身の宿世をば知らず明け暮れものをのみ思ひむすぼほれ侍れば、見え給へらるるたびに胸痛く侍れど、今はよろづかひなきことなればうち置き侍りぬ。（自分ガ）たち隠れなん後、人笑はれにあはあはしきさまにもてなし給はで、誰がためも世のもどきならぬやうにものし給へ。それなんこの世の外の喜びと思ひきこえさすべき。……」（春・三一）

と東院上のことを依頼している点と関係があろう。もう一つは鎌倉期の改作本といわれている現存『住吉物語』[6]には、延喜帝皇女と中納言との間に生まれた姫君は母宮の死後、継母の讒言にあって、侍女の侍従とともに母宮の乳母であった住吉尼君のもとに失踪したものの、かつての恋人に発見されて結婚するわけだが、「継母、おのが娘よりはじめ、聞く人にいたるまでうとみ果てにければ、その住みかも住み荒れて、蓬が杣となり果てて、むくつけき女とただ二人明かし暮らし」[7]た後に、死去したと語られている。だが、住吉姫君の父親や夫少将の継母に対する〈報復〉は一切語られてはおらず、むしろ継母への供養が住吉姫君によってなされたという点と東院上に対する〈非報復〉のあり方が関連するのではなかろうか。それは継母の落窪姫君への〈いじめ〉に対する落窪姫君の夫道頼と侍女あこぎの〈報復〉が明確に語られている『落窪物語』とは対照的であって、『苔の衣』と現存『住吉物語』との前後関係は明確にしがたいものの、両作品はほぼ同時代のもので、同時代的状況が反映されているのではないかと考えられ、両作品は〈非報復〉の〈継子譚〉の系列に位置するとみなされよう。[8]

だが、『苔の衣』においては〈継子譚〉とは異なった〈いじめ〉に対する〈報復〉が語られている。西院姫君に対して三条帝は入内要請をするものの、父権大納言は西院上の姉である前斎宮（関白北の方）所生の三条帝の藤壺中宮と結果的に拮抗することになるのを懸念して承諾しないわけだが、西院姫君を垣間見て恋慕し続けている苔衣大将（後に出家）は西院姫君の入内予定を聞いて病臥し、危篤となったために、その理由を知った父関白は西院姫君の父親に事情を説明した結果、入内予定が取り下げられ、苔衣大将は西院姫君と結婚することになる。そのことを知った三条帝の苔衣大将に対する態度は以前とは変わらないものの、「折節につけて（西院姫君ノコトヲ）なほ思し捨てられず、口惜しうゆかしう思し召さる」（秋・一四七）と語られており、それが後述する苔衣大将に対する〈いじめ〉を発動させる契機となったのではなかろうか。一方、三条帝は「（権大納言ノ二男デアル）近衛の中将をもかき絶え召しも使はせ給はず、内の大臣のあ

たりをばいと便なしと思し召し」て、「なほ内の大臣のあたりは、いとつらしと思し召されたるも」（以上、夏・一一四）と語られているように、三条帝は西院姫君の父や息子を忌避するわけだが、やがて「許しなく思したりし内の大臣（もとの権大納言）の御ゆかり、中将などもやうやうありしに変はらず召し使はせ給ふ」（夏・一一七）ようになり、権大納言一家に対する三条帝の〈いじめ〉は一応収束するのである。

では、西院姫君を横取りした苔衣大将に対する三条帝の〈いじめ〉はなかったのだろうか。三条帝の父冷泉院は嵯峨に隠棲するに当たって、娘の弘徽殿腹姫宮（以下、弘徽殿姫宮と称する）を苔衣大将に降嫁させたい旨を三条帝に語り、三条帝も賛成するわけだが、三条帝はこの件に関して苔衣大将は同意しそうもないと理解するものの、「冬ごろただ押し譲りてん」（秋・一三九）と決断する。その根底には、「右の大臣（もとの権大納言）などの（西院姫君ガ入内スルコトヲ）いと便なきさまに受け引き奉らで、左右無く（苔衣大将ニ）思ひ譲りたるもめざましう思し召して置きたる」（秋・一三九）ことがあったのだと語り手も推測しているわけだが、これは西院姫君を獲得できなかったことに対する三条帝の苔衣大将への強力な〈いじめ〉を意味するのではなかろうか。[9] それは例えば「『その便なき（注―西院姫君が入内せずに、苔衣大将と結婚したこと）を御門の君も思し詰めたりけるにや』」（秋・一四〇）という世間の〈うわさ〉として語られていることからも、この降嫁の件を世間でも三条帝の苔衣大将に対する一種の〈いじめ〉として考えていた証拠ではなかろうか。弘徽殿姫宮の苔衣大将への降嫁の話を聞いた西院姫君は発病し、やがて死去したことに対して、三条帝は「大将の心の中あはれに思しや」（秋・一五六）り、「（苔衣大将ガ）ともすればうち鎮まりつつながめがちなるを、（三条帝ハ）理とあはれに御覧ず」（秋・一七一）とあるごとく、苔衣大将に対して同情を示しはするものの、西院姫君死去のために、容易には進展しそうにもない降嫁の件を三条帝は父関白に「気色立たせ給ふ」（秋・一六九）と語られているように、降嫁の件をあくまでも強行しようとするのだ。そこに三条帝の苔衣大将への〈いじめ〉が発動されていると考えざるをえまい。

ところで、最愛の西院姫君の死が迫った際の苔衣大将は、

⑰ いと悲しう覚えて、限りあらん道も後れ先立たんことはなほ心憂しと思したるを、上（西院姫君）は心苦しう見給ひて、……（秋・一五〇）

と語られているが、これは桐壺更衣の死を目前にして、桐壺帝が、

⑱「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいみじと見たてまつりて、……（桐壺・一―二二）

に依拠したものであり、さらに、西院姫君の死後における描写にも、

⑲ 限りある道は叶はざりければ、（西院姫君ガ）終に消え果て給ひぬるを、殿（苔衣大将）人目も知らず思されつつ、（西院姫君ノ）御顔のもとにさし寄り、「限りある道なりともかばかりのほだしどもを見捨てては、いづちへおはすべきぞ。『後らかし給ふな』とこそ世とともに契り奉りしか」とて、御顔の上にふりかけ給ふ御涙吉野の滝にもたちまさりていみじげなる。（秋・一五五―一五六）

と語られているわけだが、これは⑱と同様の内容であり、また、

⑳ 人（西院姫君）の有様さへ夢の中にだに（苔衣大将ガ）見給はぬぞ、なほ思ひや

るかたなくぞ思さる。

夢にだにまどろまれねば亡き魂のありかをそこと見ぬぞ悲しき（秋・一六二）

とあるのは、故桐壺更衣邸に遣わされた靭負命婦が帰参した後、

㉑（桐壺更衣母カラノ形見ノ）かの贈物（桐壺邸ハ）御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵ならましかばと思ほすもいとかひなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく（桐壺・一―三五）

に依拠したものである。[10] このように西院姫君の死の直前直後の状況は桐壺更衣に対する桐壺帝のあり方と軌を一にしているのであって、苔衣大将の慟哭が詳細に語られており、苔衣大将が桐壺帝に重ね合わせられているという点からも、西院姫君を喪失した苔衣大将の衝撃の深さが浮き彫りにされているのだ。[11] とすれば、この秋の巻は秋という季節感と相俟った哀傷的性格を基軸に据えた構成になっているといえよう。

では、西院姫君を喪失した後の苔衣大将はどのように語られているのだろうか。

Ⓐ 昔より思ひそめ給ひし道ぞいとど急がれ給ふ。（秋・一五七）

Ⓑ 思ひたつ本意かなはばまことに一筋にこそは（苔衣姫君ヲ中宮ニ）譲り奉らんずらめなど思して、……（秋・一六五）

Ⓒ いとど思し立つ方の本意叶ふべきにこそ。（父ハ）いつまでかく（注―弘徽殿姫宮との結婚）のたまはんとあはれに思さるれば、……（秋・一七〇）

Ⓓ 宮（苔衣大将と兄妹である藤壺中宮）は姫君（苔衣姫君）の御事などのたまひ出でて、いとゆかしげにものせさせ給ふを、げに心の中の本意違はずはこの宮（中宮）にこそ（娘ノ苔衣姫君ヲ）ひとへに譲りきこえめ。（秋・一七一）

Ⓔ 思し立つ方のみ急がれ給へば、……

Ⓕ 大将はいとど憂き世を出でんいそぎのみせられ給ふ。（以上、秋・一七二）

Ⓖ あはれ、我が世の限りやと、嬉しき方（注―出家のこと）にさへ覚え給ふにも、……（秋・一七三）

Ⓗ 限りの御事（注―西院姫君の最後の法事）と思せば、……（秋・一七五）

Ⓘ 九月晦になりぬれば、我が身も秋もこの暮に限り果てぬる心地して、……（秋・一七六）

Ⓙ 暮れ方になりぬれば、（冷泉院ヲ）出で給ふにも、ただ今日に閉ぢめたる（冷泉院トノ）御対面いかでかあはれに思さざるべき。（秋・一七七）

Ⓚ いかなる昔の契りにて、いにしへも身に代ふばかり物思ひ、今はまた終にかくなり果つらん。かかること（注―西院姫君の死）無からましかば、たちまちに何のゆゑにかは憂き世をも厭ひ捨つべきと思すに、……

Ⓛ（出家シテ）都の外ならん住まひにては（故西院姫君ノ墓モ）え見奉るまじきぞかしと思すにぞ、今一重隔てん別れもいと悲しうて、とばかり立ちも出でられ給はず。（以上、秋・一七八）

と、苔衣大将の出家願望や出家に関わることが頻繁に語られている。特にⒸの直後に、苔衣大将の父関白への会話の中で、

㉒「かたじけなき（弘徽殿姫宮降嫁ノ）御許しをいかでか受け引き奉らぬことは侍るべき。ただ常に乱り心地よからぬやうにて、……心一つに営み侍ること過ぎて、冬つ方にても侍れかし。……ついでにはさやうに奏せさせ給ふべくや」とすくよかにのたまふを、……（秋・一七〇）

と苔衣大将の弘徽殿姫宮降嫁の承諾が語られた後に、「いとめづらしく（関白ガ）嬉しと思したる御気色ども見給ふに、あはれ罪得らんかしとぞ思さるる」（秋・一七〇）と苔衣大将が父親と三条帝とを欺くことが罪作りであると思っている点から、強固な出家の意志がありながらも降嫁を承諾するという苔衣大将の考えには、三条帝への〈報復〉の姿勢が顕在化しているとみなすべきではなかろうか。その後に、

㉓（三条帝トノ）御対面心のどかなるに、殊の外に（苔衣大将ガ）面痩せたりしも近優りになまめかしう優なるさまを、今はひとへに御方人と思すにいとど御目のみ止まるぞ、をこがましきや。（秋・一七一）

とあるわけだが、苔衣大将の真意を知らずに、近い将来、異母兄妹である弘徽殿姫宮の夫となる苔衣大将を「方人」（仲間）だと思い込んでいる三条帝が、波線部のごとく戯画的に語られている点に注意すべきだろう。すなわち、降嫁を強行しようとする三条帝の行為を〈いじめ〉だと受け取り、それに対する〈報復〉が隠蔽されているにもかかわらず、自分の仲間になると喜んでいる三条帝のお目出度さが戯画化されているのだ。さらに、Ⓗ Ⓘ Ⓙには直接的に出家を意味する語句はないものの、俗世間における最後の行為であると苔衣大将が認識しているところに、俗世間との訣別＝出家の意志が内在化されているのだ。

以上のように、徐々に苔衣大将の出家願望は強化され、両親及び藤壺中宮への手紙を残して出家するのである。もちろん、苔衣大将の出家願望の根底には西院姫君の死が大きく関わっているけれども、西院姫君を死に至らしめた弘徽殿姫宮降嫁の件に関する三条帝の〈いじめ〉に対する〈報復〉の意味がそれ以上に内包されているのではなかろうか。

ところで、苔衣大将出家事件に関して、

㉔御門もかく聞かせ給ひて、さばかりこの世に有り難かりしさまを何事によりさしも思ひ捨てけんと、あはれに思されて押し拭はせ給ふ。

㉕いかなることによりさしもめでたかりし有様を背き捨てけんと、（冷泉院ハ）あはれに悲しく思さるる中にも、……（以上、秋・一九二）

とあるごとく、苔衣大将の出家の真相を全く理解していない三条帝と冷泉院とのお目出度さが戯画的に語られているといえよう。それに対して弘徽殿姫宮は「かやうのこともひとへに我ゆゑとのみ、いと御身のほど思し知られて」（秋・一九三）とあるように、苔衣大将の出家の原因は自分にあったのだと冷静に認識していたのだ。苔衣大将が弘徽殿姫宮の降嫁直前に出家したのは、今まで述べてきたごとく、三条帝の〈いじめ〉に対する〈報復〉が顕在化したのだと考えられるわけだが、苔衣大将の隠蔽された出家断行は三条帝の露骨な〈いじめ〉とは対極に位置付けられ、ここにおいて西院姫君をめぐる苔衣大将と三条帝との確執が幕を閉じたのだといえよう。

以上のように、苔衣大将の出家は単に西院姫君の死によるものばかりではなく、三条帝の〈いじめ〉に対する苔衣大将の〈報復〉を一層重視すべきだと述べてきたわけだが、秋の巻は三条帝と苔衣大将との間で展開された、いわば《報復合戦》だったのだ。とすれば『源氏物語』において、桐壺巻で右大臣側から弘徽殿女御所生の第一皇子（朱雀帝）の結婚相手として申し出のあった左大臣女の葵上を光源氏と結婚させたことは、単に政治的な視点からではなく、それが右大臣側の〈報復〉に脈絡していくのを押さえていく必要があろう。すなわち、光源氏と朧月夜との情交のために、朧月夜が朱雀帝に入内できなかったことが光源氏の人生史にとって一つの

大きな出来事を招来したと考えられるが、「故姫君（葵上）を、ひき避きてこの大将の君（光源氏）に聞こえつけたまひし御心を、后（弘徽殿女御）は思しおきて、（左大臣ヲ）よろしうも思ひきこえたまはず」（賢木・二―一〇二）とあり、また「『致仕の大臣（左大臣）も、またなくかしづきひとつ女（葵上）を、兄の坊にておはするには奉らで、弟の源氏にていときなきが元服の添臥にとりわき』」（賢木・二―一四八）と弘徽殿女御が父右大臣に語っているところからすれば、朱雀帝を押しのけての葵上と光源氏との結婚が、深層的に右大臣側の〈報復〉の原動力となって、光源氏の須磨・明石流離事件の一因ともなったと考えられるのではなかろうか。これは、苔衣大将と三条帝との西院姫君獲得をめぐる確執→三条帝による苔衣大将への弘徽殿姫宮降嫁の強要（〈いじめ〉）→苔衣大将の降嫁に対する見せかけの承諾と降嫁直前の出家（〈報復〉）という話筋に、『源氏物語』とは事情は異なるにせよ、一脈通じるものがあり、この『源氏物語』のあり方が『苔の衣』においては、〈確執〉→〈いじめ〉→〈報復〉という単純な話筋に変奏されて語られたのではなかろうか。とすれば、前述した桐壺更衣の死に関する摂取のあり方と相俟って、従来より考えられてきた以上に本物語に対する桐壺巻の影響力の大きさを再考していく必要があるのではなかろうか。

おわりに

今まで述べてきたように、権大納言の北の方である東院上と西院上の造型に関して、葵上と紫上という対照的な人物が組み合わされ、特に、紫上には子がないという点と実母明石君の身分上の問題もあって、明石姫君を養女にしており、〈継子譚〉による〈いじめ〉の可能性も考えられるものの、「（明石姫君ハ）上（紫上）にいとよくつき睦びきこえたまへれば、いみじううつくしきもの得たりと思しけり」（薄雲・二―四三五-四三六）とあるように、その可能性はなく、それを逆転させたところに、東院上の西院姫君に対する〈いじめ〉が現出し、後に苔衣大将に対する三条帝の〈いじめ〉と苔衣大将の〈報復〉に脈絡していくという構成となっている。二人の北の方のあり方が、後の話筋に大きく関わってくるのだ。このように『苔の衣』は『源氏物語』における葵上・紫上・桐壺更衣といういわば初期の巻々に登場してくる女性たちに注目して、『源氏物語』の新たな〈再生産〉を目論んだのだ。「玉光るばかりの若君」で、「光源氏の稚児生ひもかほどにはあらじかしとおぼゆる人」（以上、春・一〇）と語られている苔衣大将は光源氏の再生であり、その苔衣大将を出家せしめたところに、三条帝への〈報復〉が内包されていたとしても、概して薫志向になりがちであった平安後期から鎌倉時代にかけての男主人公像の傾向とは異なった『源氏物語』の新たな〈再生産〉がなされたのだ。

注（1）足立繭子「転倒した『狭衣物語』鎌倉物語『苔の衣』と《始源》なるものへの指向」（叢書・文化学の越境『《みやび》異説』所収　森話社　一九九七・5）。これを受けて山田利博（「苔の衣」『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版　二〇〇二・5）も「『狭衣物語』の裏返し」と述べている。

（2）本文は『中世王朝物語全集』により、漢数字は当該ページ数を示す。なお、私に表記の一部を改めた個所がある。

（3）本文は新編日本古典文学全集『源氏物語』により、上の漢数字は分冊の番号、下の漢数字は当該ページ数を示す。なお、私に表記の一部を改め

た個所がある。

(4) ちなみに、東院上の姉である中君（式部卿宮北の方）にも「思しむつかりたる」「むつかり給ひて」などということばが冬の巻に集中的に五例用いられている点からも、東院上と中君との類同性も指摘できよう。

(5) 秋・冬の巻では「少納言の乳母」とある。

(6) 石川徹『平安時代物語文学論』第三章「古本住吉物語の内容に関する臆説」（笠間書院　一九七九・4。初出、「中古文学」第三号　一九六九・4）は、古本と現存本とは前半の姫君の発見に到るまではかなり類似しているが、後半部分では骨子を除いて大幅に相違していたのではないかと推測している。

(7) 本文は新編日本古典文学全集による。

(8) さらに『小夜衣』では、按察使大納言（後に関白）の娘である姫君（兵部卿宮と結婚し、宮が即位した後には、中宮となる）の母親が死去した後、帝（後に嵯峨院）が継母の娘である梅壺女御の母代として出仕した姫君に恋慕したために、梅壺女御への帝籠が薄れるのを懸念した継母が乳母子の民部少輔に姫君を拉致、監禁させるという〈いじめ〉を行なうが、結果的には継母への〈報復〉はなされておらず、これは『苔の衣』の継母の〈いじめ〉に対する〈非報復〉のあり方と同様であって、その点に関して、『苔の衣』と『小夜衣』との類似性を指摘できよう。とすれば、『苔の衣』は『風葉集』に作中和歌が採られているのに対して、『小夜衣』は所収されていない点からすれば、『苔の衣』の継母への〈非報復〉のあり方が『小夜衣』に影響を及ぼしたとも考えられよう。

(9) 『源氏物語』において、朱雀帝は朧月夜が光源氏を思慕しているのを知悉しながらも、執着し続けるわけだが、後に朱雀院は紫上の存在を知りながらも、光源氏に娘女三宮を降嫁させようとする点に、光源氏への〈報復〉が内包されているのではないかと、ノーマ・フィールド（『源氏物語、〈あこがれ〉の輝き』みすず書房　二〇〇九・1）は注の個所で指摘している。とすれば、『苔の衣』の作者は如上のことを念頭に置いて利用したのかもしれない。

(10) 紫上の死後、光源氏は「たづねゆく」の歌と類似する「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ」（幻・四―五四五）の歌を独詠している。この歌からの影響も考えられるが、苔衣大将歌の第三・四句「魂のありかをそこと」と桐壺帝歌の第四・五句「魂のありかをそこと」とが完全に一致している点から、苔衣大将歌は桐壺巻における桐壺帝歌の影響に依るものと考えたい。

(11) 安達敬子（「擬古物語と源氏物語―『苔の衣』・『木幡の時雨』の場合―」『源氏物語研究集成』第一四巻所収　風間書房　二〇〇〇・6）は秋の巻の大半が若菜上巻から幻巻までの換骨奪胎であるとし、桐壺巻の影響も指摘している。

（おおくら　ひろし　日本語日本文学科）